

## 「研究ノート」

### 知覚動詞補文に出現する受身表現の容認可否について

村岡宗一郎

#### Abstract

Regarding the use of the non-finite verbs in the complement of perception verbs, “be + -en” is unacceptable, while “{being / get} + -en” are acceptable. However, unacceptable forms such as “see NP be + -en” are used in practice, for example, “I couldn’t stand to *see her be cremated*. (Murakami Haruki, *Killing Commendatore*).” This study analyzes how often these example such as “see NP be + -en” are used in reality and what semantic constraints are imposed upon them by examining data from corpora, such as BNC and COCA. This study confirms that “see NP be + -en” is used more often in American than in British English, and “see NP get + -en”, which has been considered by previous studies to be grammatically correct, is also mainly used in American English. I conclude that the use of “see NP be + -en” has increased along with the use of “see NP get + -en” in American English.

#### 1. はじめに

現代英語における知覚動詞は、(1a-b) に示すように、補文に原形不定詞、現在分詞、過去分詞をとる。このうち、原形不定詞は当該事象の全体性や完結性を表し、現在分詞は一時性や非完結性を表す (cf. Allen (1974<sup>4</sup>: 186))。過去分詞は当該動詞がもつプロセスの終点に焦点をあて (cf. Langacker (2008: 121)), 受身を表すが、(1c) は一般的に容認されていない。

- (1) a. I *saw the children eat(ing)* their lunch. (Palmer 1987<sup>2</sup>: 199)  
 b. I *saw the children (being) beaten* by their rivals. (ibid.)  
 c. \*I *saw him be rejected*. (Bolinger 1974: 69)

しかし、村上春樹の『騎士団長殺し』の英訳には、I couldn't stand to *see her be cremated*. という例が確認されており、安藤 (2005: 829, 2008: 113) は稀な例とする。本研究では (1c) の *be -en* 補文がなぜ容認されないのか、また *be -en* 補文が稀であるという言語事実に関して、どのような制約が課されるのかを明らかにしていく。本論考の構成は以下の通りである。まず、第2節では、知覚動詞補文における受身表現について先行研究の分析をまとめていく。そして、第3節では、先行研究の分析をもとに、BNCとCOCAを用いて知覚動詞補文における受身表現の分布を調査し、第4節では、調査結果について考察していく。

## 2. 知覚動詞補文における受身表現について

*be -en* 補文を容認する先行研究は (2) のように少数であり、Burzio (1986: 312) などの先行研究では (3) のように、一般的に非文法的であるとされてきた (cf. Bolinger (1974: 69), Miller (2002: 249), Basilico (2003: 9), Dixon (2005<sup>2</sup>: 252))。

- (2) a. I *saw her be killed*. (Wilder 1992: 215)  
 b. I *saw the dogs be all called* back by their owners. (Guasti 1993: 133)  
 c. I ~~*saw / heard*~~ *the teachers be fired*. (Sheehan and Cyrino 2018: 3)
- (3) a. ?Mary *saw the princess be kissed* by the frog. (Lapointe 1980: 772)  
 b. We *saw the dog (\*be) run* over by lorry. (Declerck 1991: 490)  
 c. \*?John *saw Bill be examined* by a doctor. (Clark and Jäger 2000: 19)  
 d. \*Jane *saw Peter be kissed*. (Gisborne 2010: 209)

*see* 以外の知覚動詞について、Akmajian (1977) は (4a) に見られるように、*watch NP be -en* もまた非文法的であると分析するが、Lapointe (1980: 722) では認められている。*hear* の場合は、Declerck (1991) や Dixon (2005<sup>2</sup>: 252) は *be* の削除は義務的であるという。

- (4) a. \*We *watched the rebels be executed* by the army. (Akmajian 1977: 440)  
 b. I've never *heard it (\*be) said* before. (Declerck 1991: 490)

その一方で、安藤（2005: 829, 2008: 113）は、Palmer（1965: 171）の例を引用し、be を付けるのはまれであると述べ容認しているが、引用元の Palmer（1965: 171）の記述は Palmer（1974, 1987<sup>2</sup>）から削除されているため、この分析については検証する必要がある。このように、原形不定詞補文において be -en 補文はなぜ現代英語では非文法的とみなされる傾向にあるのだろうか。次節以降、be -en 補文の容認可否性について考察し、分析を加えていく。<sup>1</sup>

### 3. 知覚動詞補文における受け身表現の容認可否

まず、知覚動詞の原形不定詞補文における be -en の出現について、(3) で見たように、従来非文法的であるとされてきた。Dixon（2005<sup>2</sup>: 252）によれば、be -en 補文の主語は知覚事象を開始する参与者ではないため容認されないと分析する。その一方で、Bolinger（1974: 69）や Miller（2002: 249）などの先行研究によれば(5)に示すように、受身を表す get -en は容認されている。また watch にも同様の容認可否性が見られる。

- (5) a. John *saw Bill* {get / \*be} *examined* by a doctor. (Clark and Jäger 2000: 19)  
 b. We *watched the rebels* {get / \*be} *executed* by the army. (Akmajian 1977: 440)

これは状態的な be と動作的な get の違いであると考えられる。<sup>2</sup>このように状態受動が容認されない理由について、知覚動詞は(6)のように目に見える動作や状態のみを知覚対象とするため、状態性の強い be -en 補文は非文法的となる傾向にあると考えられる。

- (6) Martha *saw the policeman* { *nude* / \**intelligent* / *run(ning) into the bar* / \**own a car* /  
 \**nice guys to old ladies* / *be(ing) heroes* / *chased by the*  
*Robbers* / \**be mammals* / *in the cruiser* / *with the monster*  
 / \**liked by the robbers.* (Carlson 1977: 125)

吉良（2006: 46）もまた、(7)のような原形不定詞補文における状態動詞の出現について、「状態的な出来事」は終結点を持つ「完了した事象」とは捉えられず、容認できないという。

- (7) a. \*We *saw John look* pretty sick. (Akmajian 1977: 440)  
 b. \*I *saw Tom* still *resemble* your father. (Declerck 1981: 89)

柏野 (1993: 80) は、原形不定詞を用いるということは、補文動詞を抽象化するということになる。と述べ、補文動詞の抽象化には一定の制限があり、通例、開始点と終結点として捉えられる動詞や瞬間動詞のように行為そのものが点として捉えられる動詞が用いられ、(8a) の *look* のように、開始点と終結点のはっきりしない状態動詞を原形不定詞で抽象化するのは、まず不可能だという。また(2)と(3)で見たように、*be -en* 補文において文法性の判断に差が見られる要因については、抽象化、つまり、何を点と見るかについては人により、あるいは文脈により差があるためであるという。また動作性を表す *be -en* 補文について、Bolinger (1974) は(8)のように習慣や反復を表す場合には、*be -en* 補文も容認されると述べるが、これは個々の状態的な出来事が繰り返しの動作として捉えられるためである。<sup>3</sup>

- (8) a. I used to *see him be rejected*. (Bolinger 1974: 69)  
 b. Again and again I *saw him be rejected*. (ibid.)

また知覚動詞補文においては、(6)で見たように、Martha *saw the policeman be mammals* の様な個別レベル述語は容認されないが、*be* が非状態性を表している場合には、原形不定詞補文における *be -en* の出現は容認される。このことについて、白井 (1999: 20) は振る舞うというような動作的な *be* であれば(9a)は適格であると述べ、中右 (1980: 148) も同様に、*be -en* が非状態的な事態を表している場合には、(9b)は適格文であると分析する。

- (9) a. We *saw John be polite* for the first time. (Arimoto 1989: 119)  
 b. I don't like to *see people be intimidated*. (中右 1980: 147)

さらに、Bolinger (1974) や柏野 (1993: 81) は、(10)のように知覚動詞の完了形であれば、原形不定詞補文においても、*be -en* の出現が容認されるという。

- (10) I *have seen him* {*get / be*} *rejected*. (Bolinger 1974: 69)

現在完了には「完了・結果」と「経験」の二つの解釈が可能であるが、柏野 (1993: 78) によれば、主文が完了形で「完了・結果」の意味の場合には、主文に示される知覚過程の完結を強調するので、補文の行為も終わっていることを表すため、原形不定詞が選ばれるという。その一方で、補文の動詞が状態動詞で主文の動詞の時制が「経験」を表す完了形であれば、状態動詞 (be を含む) も補文に生起可能となると述べ、主文が過去形の場合には、一般に抽象化のできなかつた状態動詞も、主文が抽象化された概念を表す「経験」の完了形になると、完了形の意味そのものが抽象化された概念なので、その影響を受けて抽象化が可能になるという (cf. 柏野 (1993: 79, 81))。<sup>4</sup> 以上の先行研究をまとめると、知覚動詞補文における be -en の出現は、be -en が動作的なものや知覚動詞の完了形が用いられている場合には容認される。次節以降、知覚動詞補文における be -en の使用について調査を行う。

#### 4. 調査概要と結果

前節にて、先行研究の見解をもとに知覚動詞補文における be -en の容認可否について分析し、容認される条件として知覚事象の動作性の強化という条件のもとで知覚動詞補文における be -en の出現が容認されうることが明らかになった。これらの先行研究の結果がどれほど実際の言語使用を捉えられているのかを検証するために、BNC と COCA を用いて調査を行う。<sup>5</sup> 調査を行うにあたって用いる検索式については、補文主語のバリエーションを考慮し、(11) のように、“(形容詞+) 名詞”, “代名詞”, “(不) 定冠詞+(形容詞+) 名詞”の7パターンに、複合名詞句を形成していると考えられる“(不) 定冠詞)+(形容詞+) 名詞+名詞”の6パターンを加えた計13パターンの名詞句を対象として検索した。<sup>6</sup>

- (11) a. {[see] / [hear] / [watch]} (ART / DET) (ADJ) NOUN be \_v?n  
 b. {[see] / [hear] / [watch]} PRON be \_v?n  
 c. {[see] / [hear] / [watch]} (ART / DET) (ADJ) NOUN NOUN be \_v?n

これらの検索式を用いて、知覚動詞 see の補文内部における受身表現の分布を調べた結果、イギリス英語では、be -en は少なく、being -en が圧倒的であった。また従来先行研究で容認されていた get -en の出現についてもイギリス英語に

は殆ど検出されなかった。その一方で、アメリカ英語では、get -en の用例が多く、be -en もまたイギリス英語より多く検出された。

表 1. BNC と COCA の see の補文における受身表現の分布

	BNC		COCA	
<b>[see] NP be -en</b>	<b>4</b>	<b>1.6%</b>	<b>118</b>	<b>4.5%</b>
[see] NP being -en	233	95.9%	1698	64.4%
<b>[see] NP get -en</b>	<b>3</b>	<b>1.2%</b>	<b>647</b>	<b>24.5%</b>
[see] NP getting -en	3	1.2%	174	6.6%
TOTAL	243	100.0%	2637	100.0%

see NP {be / get} -en の用例は (12) に示す通りである。COCA の be -en 補文には、主に born, made, used, prepared, taken が用いられ、一方で get -en 補文には主に hurt, hit, killed, arrested, shot, beaten が用いられていた。

- (12) a. I want to *see the baby be born*. (COCA: 2013. SPOK)  
 b. Did you *see him get hit* in his face? (COCA: 1999. MOV)  
 c. I would like to *see the scheme be taken* on, (BNC: H49. S\_meeting)  
 d. they all thought theyd *see us get thrashed*. (BNC: J1D W\_email)

watch について同様の調査を行ったところ、表 2 に示す結果が得られた。イギリス英語においては、see の場合と同様に {be / get} -en の出現は殆ど見られなかった。しかし、アメリカ英語では、{be / get} -en の出現はほぼ同じ割合で検出された。これは、watch が動作的なものを補部にとるためであると考えられる。

表 2. BNC と COCA の watch の補文における受身表現の分布

	BNC		COCA	
<b>[watch] NP be -en</b>	<b>0</b>	<b>0.0%</b>	<b>199</b>	<b>21.0%</b>
[watch] NP being -en	71	97.3%	509	53.7%
<b>[watch] NP get -en</b>	<b>1</b>	<b>1.4%</b>	<b>220</b>	<b>23.2%</b>
[watch] NP getting -en	1	1.4%	19	2.0%
TOTAL	73	100.0%	947	100.0%

watch NP {be / get} -en の用例は (13) に示す通りである。COCA の watch NP be -en には、主に killed, destroyed, taken, murdered, born が用いられ、一方で watch NP get -en には主に beaten, slaughtered, blown, killed, hit, knocked が用いられていた。

- (13) a. I won't stand by and *watch him be executed*. (COCA: 2019. TV)  
 b. We're not gon na sit around and *watch them get slaughtered*. (COCA: 2000. TV)  
 c. we *watched surface responsibility get peeled* away from a lot of people... (BNC: K2R. W\_newsp\_other\_arts)

hear は表 3 に示すように、{be / get} -en の例はイギリス英語では検出されず、アメリカ英語においてもほとんど検出されなかった。hear NP {be / get} -en の用例は (14) に示す通りである。COCA の be -en 補文には、主に called, compared, taken が用いられ、get -en 補文に特徴的なものは見られなかった。

表 3. BNC と COCA の hear の補文における受身表現の分布

	BNC		COCA	
	Count	Percentage	Count	Percentage
<b>[hear] NP be -en</b>	<b>0</b>	<b>0.0%</b>	<b>18</b>	<b>7.8%</b>
[hear] NP being -en	50	98.0%	187	81.0%
<b>[hear] NP get -en</b>	<b>0</b>	<b>0.0%</b>	<b>12</b>	<b>5.2%</b>
[hear] NP getting -en	1	2.0%	14	6.1%
TOTAL	51	100.0%	231	100.0%

- (14) a. I've *heard you be compared* to Nico. (COCA: 2012. BLOG)  
 b. I've *heard them get called* some pretty mean names. (COCA: 2012. BLOG)

これらの調査結果は、以下のようにまとめられ、be -en 補文と get -en 補文はどちらも英米に差が見られるという結果が得られた。

表 4. BNC と COCA の知覚動詞補文における受身表現の分布

	BNC		COCA	
	件数	割合	件数	割合
<b>be -en</b>	<b>4</b>	<b>1.1%</b>	<b>335</b>	<b>8.8%</b>
being -en	354	96.5%	2394	62.8%
<b>get -en</b>	<b>4</b>	<b>1.1%</b>	<b>879</b>	<b>23.0%</b>
getting -en	5	1.4%	207	5.4%
TOTAL	367	100.0%	3815	100.0%

このように、be -en と get -en はアメリカ英語に多く見られるが、COCA で検出された用例の殆どが表 5 に示すように、被害を表す動詞の過去分詞が用いられていた。

表 5. COCA における “{see / watch / hear} NP {be / get} + -en” の過去分詞

{see / watch / hear} NP be + -en			{see / watch / hear} NP get + -en		
順位	件数	過去分詞	順位	件数	過去分詞
1	16	born	1	119	<b>hurt</b>
2	13	<b>destroyed</b>	2	55	<b>hit</b>
3	14	<b>killed</b>	3	35	<b>killed</b>
4	12	taken	4	23	<b>beaten</b>
5	7	<b>murdered</b>	5	19	<b>arrested</b>

また be -en 補文に関して、(10) で見たように先行研究では完了形で用いられる場合には容認されうるとされていたが、表 6 に示すように、COCA では be -en 補文と get -en 補文ともに約 1 割程度しか検出されなかった。その一方で、(15) に見られるように (don't) like や hate などの好き嫌いを表す語の補部として用いられている例や感情表現と共起する例が多く検出された。さらに by によって動作主が具現化された例も多くは確認されなかった。

表 6. [be / get] -en 補文と完了形・感情表現・by + 動作主の共起とその割合

総数 (英 / 米)	BNC			COCA		
	完了形	感情表現	by	完了形	感情表現	by
be -en (4/335)	0	3 (75%)	0	34 (10%)	73 (22%)	27 (8%)
get -en (4/879)	0	0	0	90 (10%)	270 (31%)	82 (9%)

- (15) a. I don't want to *see any woman be misdiagnosed*… (COCA: 1990. SPOK)  
 b. I'd hate to *see them be slimmed* down into fewer. (COCA: 2012. BLOG)  
 c. I'd like to *see writers get paid* fairly… (COCA: 2012. BLOG)  
 d. I hate to *see people get sucked* into the idea… (COCA: 1993. NEWS)

この調査から得られた結果は (16) のようにまとめられる。

- (16) a. be -en 補文は、若干ではあるが、英米に差が見られた。 (cf. 表 4)  
 b. 先行研究で容認されていた get -en 補文は主にアメリカ英語に見られた。  
 (cf. 表 4)  
 c. 先行研究の見解と異なり、現在完了形の知覚動詞が用いられている例  
 はかなり限られていたが、感情を表す語句との共起が顕著であった。  
 (cf. 表 6)

## 5. 調査結果の考察

前節にて、BNC と COCA より得られたデータについてまとめ、英米における頻度の差、そして、使用される環境について分析を行った。本節では、更に考察を深めていく。まず、英米に見られる受身表現の分布 (=16a-b) について、Felsler (1999: 83) もまたイギリス人英語母語話者は、be -en 補文の使用を避ける傾向にあるとする一方で、アメリカ人英語母語話者の多くは違和感を覚えることもあれば、文法的とみなす者もいるという。ではなぜ、英米において be -en 補文の使用頻度に差が見られるのだろうか。本論考では、get -en 補文の定着が、be -en 補文の容認可否性に影響を及ぼしている可能性について議論していく。まず、get 受動文について、Sussex (1982: 90) によればアメリカ英語に多く確認されるという。また、松元 (2011: 22) によれば、20 世紀には主として米語の口語的表現において大量に用いられ、Schwarz (2017) および (2019)

は、20世紀後半になると書き言葉においても劇的に増加するという。アメリカ英語の知覚動詞補文も同様に、get -en 補文が用いられ、その用法が確立すると、それに伴い、それまで非文法的とみなされていた be -en 補文もまた類似する表現として徐々に用いられるようになったと考えられる。このような事情から、アメリカ英語では、see NP {be / get} -en もまたイギリス英語よりも多く用いられていると考えられる。これに関連して、COHA を用いて調査を行ったところ、表7に示すように、あまり有意義な結果は得られなかったが、20世紀後半から get + -en 補文が優勢となっている。

表7. COHA における “{see / watch / hear} NP {be / get} + -en” の分布

	ALL	1830	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010
be	54	1	1	2	1	4	1		3	5	1		2	3	2	4	8	11	5
get	160			1				1	3	2	8	7	17	6	13	14	27	29	32

さらに、COCA で検出されたデータを10年毎に分類した結果、表8に示すように、2010年代から、be -en 補文と get -en 補文の総数が急激に増加していた。

表8. COCA における “{see / watch / hear} NP {be / get} + -en” の分布

	1990s	2000s	2010s	TOTAL
be -en	62	52	221	335
get -en	187	196	496	879

またこれらの例をジャンル別に分析を行ったところ、表9に示すように、be -en 補文は SPOKEN に多く見られる一方で、get -en 補文は、表10のように ACADEMIC を除いて、ジャンルに偏ることはなく検出された。

表 9. COCA における “[see / watch / hear] NP be + -en” のジャンル別分布

	1990s	2000s	2010s	TOTAL
SPOKEN	24	13	38	75
NEWSPAPER	12	5	10	27
TV	12	8	12	32
MOVIE	7	7	11	25
FICTION	5	9	6	20
MAGAZINE	1	9	14	24
ACADEMIC	1	1	3	5
BLOG	0	0	67	67
WEB	0	0	60	60

表 10. COCA における “[see / watch / hear] NP get + -en” のジャンル別分布

	1990s	2000s	2010s	TOTAL
SPOKEN	25	26	37	88
NEWSPAPER	26	32	30	88
TV	49	53	64	166
MOVIE	43	42	65	150
FICTION	26	25	29	80
MAGAZINE	15	15	35	65
ACADEMIC	3	3	2	8
BLOG	0	0	139	139
WEB	0	0	95	95

これらの調査結果から、see NP be -en は元来口語で用いられていたものが、see NP get -en の使用拡大に伴い、徐々に書き言葉として用いられるようになり、増加した可能性が考えられる。また、(16c) の調査結果について、元来 be 受動態は当該の出来事が生じることを客観的に述べるのに対し、get 受動態は、話者やその他の関係者にとって不利益（ときには利益）となることを表すとされている（cf. Huddleston and Pullum (2002: 1442)）<sup>7</sup>。COCA の知覚動詞補文においても、1990 年代から 2000 年代にかけて、感情表現と共起する be -en 補文は少数であったが、表 11 に示すように、get -en 補文の増加と共に 2010 年代になるとかなり増加していることがわかる。これらの調査結果から、be -en 補文

は **get -en** 補文の増加に伴い、類似する表現として徐々に用いられるようになったと考えられる。

表 11. COCA における {see / watch / hear} NP {be / get} +en と共起する感情表現の分布

	1990s	2000s	2010s	TOTAL
感情表現 + be -en 補文	10	7	56	73
感情表現 + get -en 補文	58	72	140	270

## 6. まとめ

これまでの先行研究では、知覚動詞補文における **be -en** 補文は非文法的である一方で、それを進行形にした **being -en** 補文や動作受身を表す **get -en** 補文は文法的であるとされてきた。このことについて、BNC や COCA を用いて調査した結果、イギリス英語においては、**be -en** 補文は殆ど検出されず、アメリカ英語では僅かではあるが検出された。また先行研究で容認されている **get -en** 補文に関してもイギリス英語ではほとんど検出されず、アメリカ英語に多く検出された。このようにアメリカ英語において、それまで一般的に非文法的であるとされていた **be -en** 補文が容認されつつある要因として、**get -en** 補文の拡大が考えられる。元来 **get** 受動文はアメリカ英語の口語的表現であり、時代を経るにつれて書き言葉においても確立した表現として用いられているが、知覚動詞補文においても、**get -en** 補文が確立すると、それまで非文法的と見なされてきた **be -en** 補文に影響を及ぼし、徐々にアメリカ英語で **be -en** 補文が用いられるようになったと考えられる。

## NOTES

(1) **be -en** 補文は *To see her Coronation be performed.* (Shakespeare, *2 Henry IV*. 1.1.47) のように通時的に観察され、韻律などの影響を受けている可能性が考えられるが、EEBO を用いて調査したところ、表 i のように、**being -en** よりも **be -en** が優勢であった。

表 i. EEBO における see NP {be / being} -en の分布

	15c	16c	17c	TOTAL
see NP be -en	3	32	161	196
see NP being -en	0	9	32	41

後述するように現代英語において be -en 補文が非文法的と見なされる要因は、原形不定詞が持つ完結性のアスペクトと be の状態性にあると考えられる。一方、知覚動詞補文に出現する準動詞の通時的調査を行った村岡 (2021) によれば、初期近代英語において、準動詞のアスペクトの差は曖昧であったという。そのため、近代英語においては現代英語と異なり、see NP be -en のような表現は容認されていたと考えられる。

(2) 村田・成田 (1996: 133) によれば、be を用いた受身は用いられる動詞によって動作を表す動作受動と動作の結果としての状態を表す状態受動とで曖昧性が生じるといふ。さらに村田・成田 (1996: 134) は be 受身では動作受動と状態受動とで曖昧になるのに対して、get 受身では動作受動でのみ用いられ、be 受身のような曖昧性は解消されるという。

(3) 同様のことが、過去の習慣を表す would にも見られ、一般的に状態動詞と共起しない。これに関して、Declerck (1991) は (ii) に示すように一定の期間における反復的な出来事を表す場合には、would は状態動詞とも共起できるという。これは個々の状態的な出来事が、繰り返しの動作として捉えられ、live が stay のような動作的な意味を帯びる為である。

(i) a. I {used to / \***would**} **be** a waiter, but now I'm a taxi-driver.

(Alexander 1988: 235)

b. I {used to / \***would**} **have** an old Rolls-Royce.

(Swan 2005<sup>3</sup>: 623)

(ii) He **would live** at the Savoy whenever he came back to England.

(Declerck 1991: 417)

(4) しかし、Gee (1975) は、(i) の例を挙げ、(10) が「完了」の読みになり得る可能性を否定している。Gee (1975: 377) によれば、「ある特定の場面で

実際に（目の前で）知覚した出来事」を表す場合には、*I saw a car be wrecked by the police.* のような例は容認されないという。そして、(ia)を「完了・結果」用法と解釈できる場合には、過去形の *saw* とほぼ同じであり、「ある特定の場面で実際に（目の前で）知覚した出来事」を表すため容認されないが、(ib)のように補文主語を複数形にして、現在完了形を「経験」用法と解釈できる場合には「異なる場面で繰り返された出来事」を表すため、容認されるという。

- (i) a. *I've seen a car (#be) wrecked by the police.* (Gee 1975: 377)  
 b. *I've seen cars be wrecked by the police.* (ibid.)

(5) 分析対象となる知覚動詞は *see*, *watch* と *hear* に限る。知覚動詞 *taste* と *smell* については、人間の五感で味覚と嗅覚は視覚・聴覚・触覚と比較すると感覚の精度が劣っており、外界の有界的出来事についての知覚をもたらす難いため、*taste* と *smell* は原形不定詞を補文に取れないとされている (cf. Pizer (1994: 340), Egan (2007: 146))。さらに、*feel* に関して、江川 (1991<sup>3</sup>: 334) によれば、完結・非完結の区別が問題にならず、どちらも同じように用いられるとされることから、これらの動詞を本研究の対象から除外した。

(6) また (re)married, (un)dressed, rid 等の受身を表さない過去分詞は除外して調査を行った。

(7) 影山 (2007: 75-6) によれば、*be* には主観的なニュアンスは生じないが、*get* 受け身文は話者の主観的な受け止め方を表し、比率として迷惑の例がはるかに多いという。

## 参考文献

- Akmajian, A. 1977. "The Complement Structure of Perception Verbs in an Autonomous Syntax Framework." In Culicover, A. W., A. Akmajian and T. Wasaw. (Eds.), *Formal Syntax*. New York: Academic Press, 427-60.
- Alexander, L. 1988. *Longman English Grammar*. London: Longman.
- Allen, W. S. 1974<sup>4</sup>. *Living English Structure*. London: Longman.
- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』東京：開拓社.
- 安藤貞雄. 2008. 『英語の文型 文型がわかれば、英語がわかる』東京：開拓社.
- Arimoto, M. 1989. "Against the Raising Analysis of BE." *English Linguistics* 6, 111-129.

- Basilico, D. 2003. "The Topic of Small Clauses." *Linguistic Inquiry* 34, 1-35.
- Bolinger, D. 1974. "Concept and Percept; Two Infinitive Constructions and Their Vicissitude." *World Papers in Phonetics Festschrift for Dr. Onishi's Kiju*. The Phonetic Society of Japan, 65-91.
- Burzio, L. 1986. *Italian Syntax*. Dordrecht: Reidel.
- Carlson, G. 1977. *Reference to Kinds in English*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Clark, R. and G. Jäger. 2000. "A Categorical Syntax for Verbs of Perception. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*," Vol. 6: Iss. 3, Article 5, 15-33.
- Declerck, R. 1981. "On the Role of Progressive Aspect in Nonfinite Perception Verb Complements." *Glossa* 15, 83-114.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Dixon, R. M. W. 2005<sup>2</sup>. *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Egan, T. 2008. *Non-finite Complementation: A Usage-based Study of Infinitive and -ing Clauses in English*. New York: Rodopi.
- 江川泰一郎. 1991<sup>3</sup>. 『英文法解説 改訂三版』東京：金子書房.
- Felser, C. 1999. *Verbal Complement Clauses: A Minimalist Study of Direct Perception Construction*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Gee, J. P. 1975. *Perception, Intentionality, and Naked Infinitives: A Study in Linguistics and Philosophy*. Doctoral dissertation, Stanford University.
- Gisborne, N. 2010. *The Event Structure of Perception Verbs*. Oxford: Oxford University Press.
- Guasti, M. T. 1993. *Causative and Perception Verbs: A Comparative Study*. Torino: Rosenberg and Sellier.
- Huddleston, R. and G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 影山太郎. 2007. 「get 受身文の統語構造と概念構造について」『英米文学』51(2), 63-82.
- 柏野健次. 1993. 『意味論から見た語法』東京：研究社.
- 吉良文孝. 2006. 「知覚動詞補文のアスペクト」『英語語法文法研究』13, 35-50.
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press, Oxford.
- Lapointe, S. G. 1980. "A Note on Akmajian, Steel and Wasow's Treatment of Certain Verb Complement Types." *Linguistic Inquiry* 11, 770-87.
- 松元浩一. 2011. 「18世紀英語の get- 受動文」『長崎大学教育学部紀要：人文科学』77, 21-35.
- Miller, G. 2002. *Nonfinite Structures in Theory and Change*. Oxford: Oxford University Press.
- 村岡宗一郎. 2021. 「知覚動詞と使役動詞補文に出現する準動詞がもつアスペクト特性の発現時期について」近代英語協会第38回大会発表資料.
- 村田勇三郎・成田圭市. 1996. 『テイクオフ英語学シリーズ2 英語の文法』東京：大修館書店.

- 中右実. 1980. 「テンス, アスペクトの比較」 國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座第2巻 文法』 東京: 大修館書店.
- Palmer, F. R. 1965. *A Linguistic Study of English Verb*. London: Longman.
- Palmer, F. R. 1974. *English Verb*. London: Longman.
- Palmer, F. R. 1987<sup>2</sup>. *English Verb*. London: Longman.
- Pizer, K. 1994. "Perception Verb Complementation: A Construction-based Account." *Chicago Linguistic Society* 30, 335-346.
- Schwarz, S. 2017. "Like Getting Nibbled to Death by a Duck: Grammaticalization of the Get-passive in the TIME Magazine Corpus." *English Word-Wide* 37(3), 305-335.
- Schwarz, S. 2019. "Signs of Grammaticalization. Tracking the Get-passive through COHA." In Claridge, S. and B. Bös. (Eds.), *Developments in English Historical Morpho-Syntax*. Amsterdam: John Benjamins, 199-222.
- Sheehan, M. and S. Cyrino. 2018. "Why Do Some ECM Verbs Resist Passivisation? A Phase-Based Explanation." *Proceedings of the 48th Meeting of the North Eastern Linguistic Society* 48, 81-90.
- 白井賢一. 1999. 「英語の知覚動詞構文の意味分析: 認知意味論と形式意味論の「橋渡し」を目指して」『中京大学教養論叢』40(1), 1-61.
- Sussex, R. 1982. "A Note on the Get-passive Construction." *Australian Journal of Linguistics* 2, 83-95.
- Swan, M. 2005<sup>3</sup>. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.
- Wilder, C. 1992. "Small Clauses and Related Objects." *Groninger Arbeiten zur germanistischen Linguistik* 34, 215-36.

(村岡宗一郎 日本大学大学院 Email: hollow\_t\_classic@ezweb.ne.jp)